

10節 ラテンアメリカ



▲① アンデス山脈にあるインカ帝国の遺跡マチュピチュ(ペルー、2013年撮影)



▲② ラテンアメリカの自然環境(Diercke Weltatlas 2008, ほか)

●地域の考察方法● ラテンアメリカは、かつてスペインやポルトガルなどヨーロッパの国々の植民地であったという歴史的背景があり、それが人々の生活や、現在の産業にも深くかかわっている。この節では、地域の特徴である「ヨーロッパの影響」を、文化や農業・工業と関連づけて考察していこう。

プラスα

ラテンアメリカの都市分布

ラテンアメリカの都市の分布には、二つの特徴がみられる。一つは高地に都市が存在することである。先住民の居住地はもともと高地が多く、インカやアステカなどの文明は高地で栄えた。低緯度地方では、人間にとつて、低地よりも高地の環境のほうが居住に適していたためである。もう一つは、大西洋側の海岸部に多くの都市が立地することである。スペイン、ポルトガルの植民地時代に、開発の拠点として都市が海岸に建設されたことによる。内陸の都市の多くは大河川に沿って立地している。

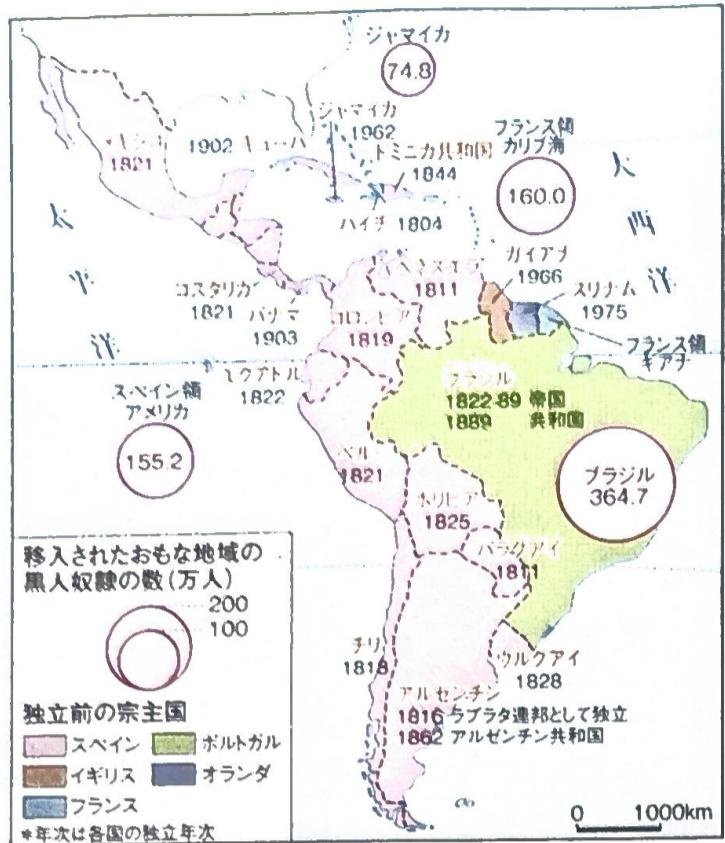
南北と標高で異なる自然環境

ラテンアメリカは、メキシコ、中央アメリカ、西インド諸島、南アメリカから構成され、赤道をまたいで南北に広がる広大な地域である。南アメリカ大陸の太平洋側には、環太平洋造山帯の一部を構成するアンデス山脈が南北にはしる。ここでは高度に伴って気候や植生が変化する。^(→ p.34) また、その最高峰は標高7000m近くになり、氷河もみられる。大小さまざまな島によって構成される西インド諸島は新期造山帯に属し、多くの火山がある。西インド諸島周辺は、ハリケーンの襲来によって大きな被害を受けることが多い。^(→ p.53)

アンデス山脈をおもな水源とするアマゾン川は、東に流れて南アメリカ大陸を横断し、大西洋に注ぐ。アマゾン川流域は、北側をギアナ高地、南側をブラジル高原に囲まれた平坦な土地であり、おもにセルバとよばれる熱帶雨林でおおわれている。ブラジル高原の北部にはサバナのセラードが広がり、牧畜に利用されたが、最近では耕地として農業開発が進んでいる。^(→ p.61) 一方、ブラジル高原やアンデス山脈から南に向かって流れ出した水は、パラナ川・ラプラタ川を経由して大西洋に注ぐ。この流域には広大な平野が広がり、とくにアルゼンチン中央部の大平原はパンパとよばれる。¹ 大陸南部のパタゴニアは乾燥しており、アンデス山脈の西側の海岸部には、寒流のペルー(フンボルト)海流の影響を受けて、アタカマ砂漠が広がる。^(→ p.55)

用語解説

1 パンパ ブエノスアイレスを中心として、ラプラタ川の河口付近に広がる平坦な平原。先住民の言葉で「草原」を意味する。東側は年降水量550mm以上の湿潤パンパで、農業や牧畜がさかんであり、人口が多い。西側は年降水量550mm未満の乾燥パンパで、放牧がみられる。



▲❶ メキシコのカトリック総本山であるグアダルーペ寺院(メキシコシティ、2014年撮影) ラテンアメリカにおけるカトリックは、先住民やアフリカ系の伝統的な宗教と融合し、ヨーロッパとは異なる信仰の形がみられるようになった。

◀❷ ラテンアメリカ各国の旧宗主国と奴隸の移動(Putzger Historischer Weltatlas 2011、ほか)

1 ヨーロッパ社会の影響が強い文化

ラテンアメリカの成り立ち

15世紀末にコロンブスが西インド諸島に到達する以前にも、南北アメリカ大陸には先住民が生活していた。とくにアンデス高地とメキシコおよび中央ア(→p.208)

メリカには先住民の人口が集中し、ここでは集約的な農業を基盤として、インカ、アステカ、マヤなどの文明が栄えた。16世紀に入ると、スペイン人やポルトガル人などのラテン系の人々が植民活動を展開した。その結果、スペイン語・ポルトガル語やカトリックなど、イベリア半島の文化や社会のしくみがもち込まれた。こうしてメキシコから南の地域はラテンアメリカとよばれるようになり、ラ(→p.229)

テン系の新しい社会と文化が形成されたが、ヨーロッパ人がもち込んだ病気が大流行して先住民の人口は大きく減少した。ブラジルの大西洋岸や西インド諸島のようにプランテーションが経営された地(→p.101)

域では、労働者としてアフリカから奴隸が強制移住させられた。

移民を受け入れた歴史

19世紀には、多くの地域で独立運動が展開され、スペイン、ポルトガルによる植民地時代は終わった。しかし、3世紀に及ぶ植民地支配は、その後のラテンアメリカの文化や経済の発展に大きな影響を及ぼした。独立後も、白を中心とした少数の富裕層が政治や経済を支配する形態が続いた。奴隸制が廃止されて労働力が不足した地域では、ヨーロッパや日本から移民を積極的に受け入れた。一方、国ごとに政治や経済の形態は多様化し、キューバのように社会主義の道を歩む国も現れた。(→p.216)

リード

写真❶のように、ラテンアメリカの社会や文化は、ヨーロッパと深いかかわりがある。これらはどのような歴史的背景のもとで形成してきたのか、みていく。

プラスα

トルデシリヤス条約による境界線

1492年にコロンブスが西インド諸島に到達してから、スペインとポルトガルによる海洋の探検が活発化した。両国はそれぞれの権益を確保するために、1494年にトルデシリヤス条約を締結した。これは大西洋上のヴェルテ岬諸島から西方に約2000kmの地点を通る南北の線を境界として、西側をスペイン領、東側をポルトガル領とするものであった。



▲❶ 大規模なさとうきび農園(ブラジル、レシフェ近郊、2011年撮影) 近年、ブラジルでは、自動車の燃料などに用いるバイオエタノール製造のためにさとうきび栽培が拡大している。

→❷ ラテンアメリカの農業(Diercke Weltatlas 2008)
読図 大豆栽培が行われている地域を確認しよう。

2 大土地所有制と農業の変化

ヨーロッパから もち込まれた農業制度

ラテンアメリカでは、大土地所有制がスペインやポルトガルからもち込まれ、農業と社会の基盤になった。大農園を所有する農園主は都市に住み、農園の運営は管理人にまかされ、実際に農業に従事するのは住み込み労働者とその家族である。これはアメリカ合衆国とは対照的で、自分で土地を所有して農業経営にあたる中産階層の農民は育成されなかった。こうしてラテンアメリカには、農園主を頂点とした社会経済階層が形成され、貧富の差の大きい社会が生まれることとなつた。

10 ブラジルでは、大土地所有制を基盤として、さとうきびやコーカス(→巻末3回)を大農園で栽培したり、牛を大牧場で粗放的に飼育したりする

という農牧業の伝統が形成された。しかし、20世紀後半以降は、多国籍のアグリビジネス企業が進出した結果、企業的な農業経営への転換が進み、伝統的な農村に変化が起きた。大型機械を導入して

15 大豆などの商品作物を大規模に栽培するため、住み込み労働者は農園を追い出された。農業生産は増加したが、農村が養うことのできる人口は縮小した。農地改革も行われてきたが、大土地所有制が生み出した貧困の問題は解消されておらず、貧富の差は大きいままである。農村で生活の場を失った人々は、大都市へ移動してファベーラとよばれるスラムを形成し、都市問題を引き起こしている。

リード

図❸のようなラテンアメリカの農業は、どのような歴史的背景の下で発展し、今日、どのように変化しているのかみていこう。

用語解説

❶ 大土地所有制 大規模な農牧場に多くの労働者を雇い、農園主の管理の下に行われる農業経営。大土地所有制にもとづく大農園を総称してラティフィンディオというが、地域によって名称が異なり、ブラジルではファゼンダ、メキシコやペルーなどではアシエンダ、アルゼンチンではエスタンシアとよばれる。

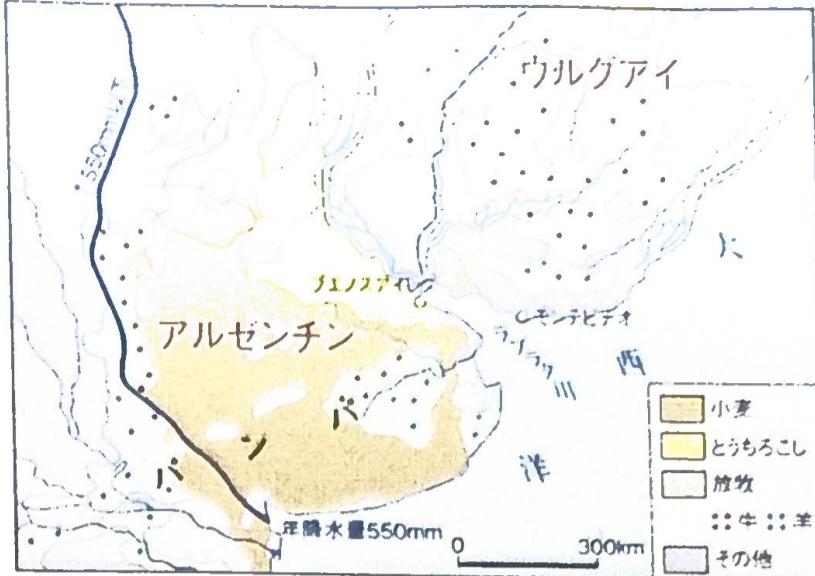


▲❸ コーヒーの実の収穫(ブラジル、ミナスジェライス州)

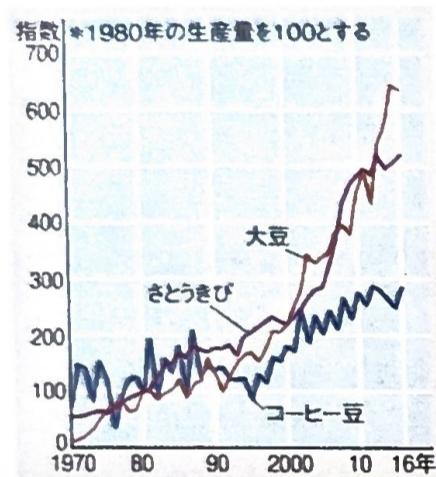
かつては手作業による収穫であったが、大規模農園では機械を用いるところが増えている。



▲① 温室で栽培されるバラ(コロンビア、2012年撮影) アメリカ合衆国をはじめ、日本にも輸出される。



▲② パンパの農牧業(Alexander Kombiatlas 2014.ほか)
読図 年降水量 550mm を境とした農牧業の違いに着目しよう。



▲③ ブラジルのコーヒー豆、大豆、さとうきびの生産の推移
(FAOSTAT)

プラスα

ラテンアメリカに進出するアグリビジネス企業

アメリカ合衆国に本拠地をおくアグリビジネス企業は、19世紀末から積極的にラテンアメリカに進出してきた。古くは中央アメリカや西インド諸島に進出したバナナ会社が有名である。最近では、ブラジルで典型的にみられるように、穀物メジャーが大豆の生産・流通・加工に関与している。外国からの資本や技術の導入は、ラテンアメリカの伝統的な農業地域に大きな変化をもたらしている。

多様な農業

ラテンアメリカでは、自然環境や歴史的な背景を反映して、地域によって特色のある農業が行われている。

19世紀からヨーロッパ出身の移民が増加したアルゼンチンでは、パンパとよばれる大平原で、小麦栽培や牛の放牧が大規模に行われている。^(→ p.308) また、中央アメリカや西インド諸島では、アメリカ合衆国やヨーロッパの資本によって、バナナなどのプランテーションが経営されている。^(→ p.101) 一方、大土地所有制や大資本の影響をあまり受けずに、先住民が伝統的な農業を行っている地域もある。アマゾンでは自給的な焼畑農業^{やきばた}が行われ、アンデス高地ではじゃがいもやとうもろこし^{やきはた}を標高に応じて栽培する伝統的な農業がみられる。^(→ p.71)

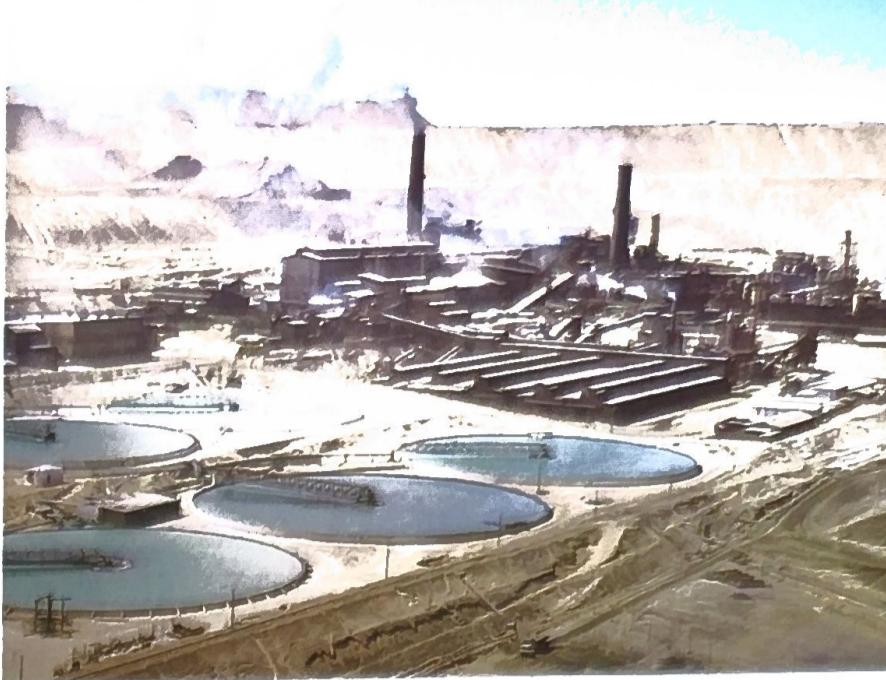
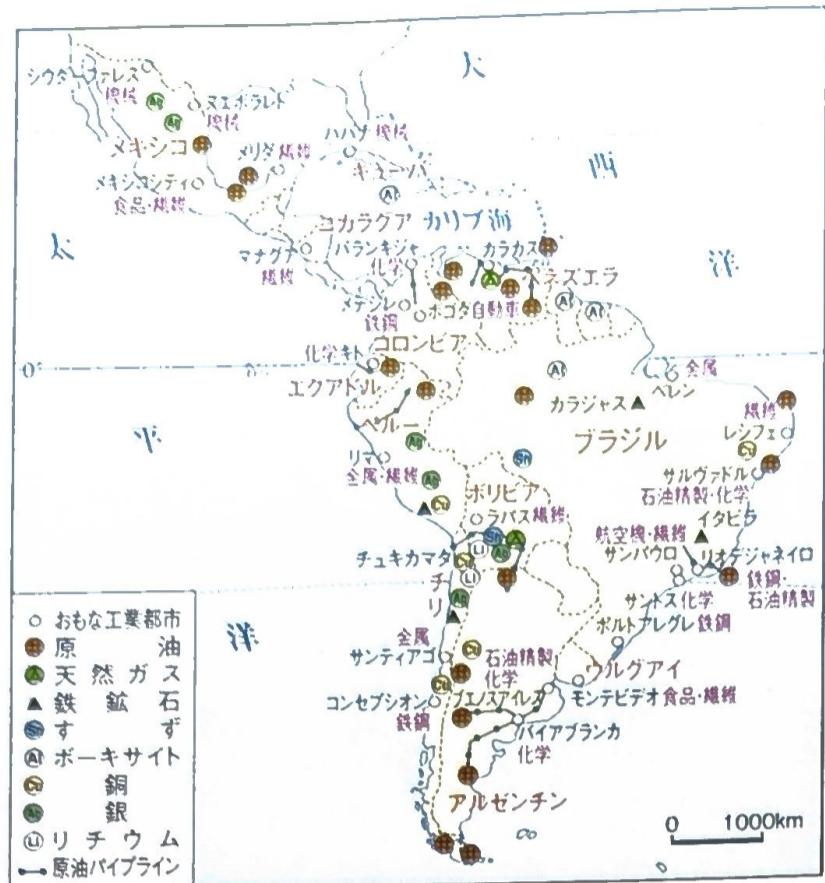
新しい農業とそれに伴う変化

近年、ラテンアメリカの各地では、国際市

場向けの新しい農業がさかんになっている。自給的な食料の生産や輸出用の限られた種類の農産物の生産から、農業の多角化・合理化がはかられており、モノカルチャー経済からの脱却と新たな雇用の創出が期待されている。メキシコやペルーなどでは野菜栽培が行われ、コロンビアの高地では、年間を通して温暖な気候を利用した切り花の生産がさかんである。ブラジルやアルゼンチンでは、アメリカ式の企業的な農業経営が導入されて大豆の大規模栽培が発展し、両国は大豆や大豆油の生産・輸出において国際市場で大きな割合を占めるようになった。ブラジルのセラードでは、日本のODA^(→ p.164)を受けて原野の大規模開発が進行し、大豆の大規模栽培地域が形成された。しかし、大型機械を使用し、農薬や化学肥料を大量に投入して遺伝子組み換え大豆を栽培する企業的農業は、伝統的な農業と土地利用とは大きくかけ離れているため、持続的な発展に結びつけていくことが課題となっている。

チェック

大土地所有制は、ラテンアメリカの社会構造にどのような影響を与えていたかを説明しよう。



⑤ チュキカマタ銅山と銅の精錬所(チリ)

10 ラテンアメリカの鉱工業（Diercke Weltatlas 2008）

読図 鉱産資源の種類と分布に着目しよう。

3 鉱産資源を基盤とした工業化と生活の変化

鉱産資源の開発

鉱産資源の開発 ラテンアメリカにおける鉱産資源の開発と工業化は、ヨーロッパやアメリカ合衆国と密接に結びついて進展してきた。ベネズエラやエクアドルの原油、ブラジルの鉄鉱石、チリの銅、ペルーの銀、ボリビアのすずなど、ここには豊富な鉱産資源が存在するため、ヨーロッパやアメリカ合衆国の企業は、資本と技術を導入して、鉄道や通信施設を整備し、鉱山開発に取り組んできた。これらの鉱産資源の輸出が長期にわたって各国の経済を支えてきたと同時に、工業化を進めるための基盤となってきた。

工業化の 進展

工業化の進展 ラテンアメリカでは、20世紀半ばに工業化が進んだ。ブラジルの場合、サンパウロの内陸部でコーヒー栽培が繁栄し、その輸出によって蓄えられた富が工業化の基盤となった。当初は輸入代替型^{だいいたい}の工業化が促進され、外国資本が積極的に導入された。(→ p.142) 例えば自動車産業では、ヨーロッパやアメリカ合衆国の資本と技術が導入された。また、アマゾン開発の拠点として、マナオスに自由貿易地区^①が設けられ、日本を含む外国企業が誘致された。(→ p.143 ③) ブラジルでは、現在は、航空機やコンピュータなどの先端技術産業もさかんである。メキシコでも輸入代替型の工業化が進展したが、

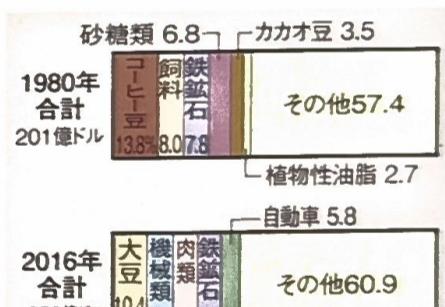
に自由貿易地区が設けられ、日本を含む外国企業が誘致された。ブ
(→ p.143 ⑤)
ラジルでは、現在は、航空機やコンピュータなどの先端技術産業も
さかんである。メキシコでも輸入代替型の工業化が進展したが、
1960年代後半からは、アメリカ合衆国との国境沿いに、マキラドーラ制度の下で、自動車部品・電子部品などを製造する輸出向け加工工場が集積した。NAFTAが締結されたあとは、マキラドーラ工場

リード

写真⑤のような欧米諸国の鉱産資源開発に始まるラテンアメリカの工業は、どのように発展したか、また経済発展により、人々の生活はどのように変化したか、みていく。

リンク→

BRICS の工業化と後発工業国 (p.143)



▲⑥ ブラジルの輸出品の変化 (UN Comtrade. ほか)

用語解説

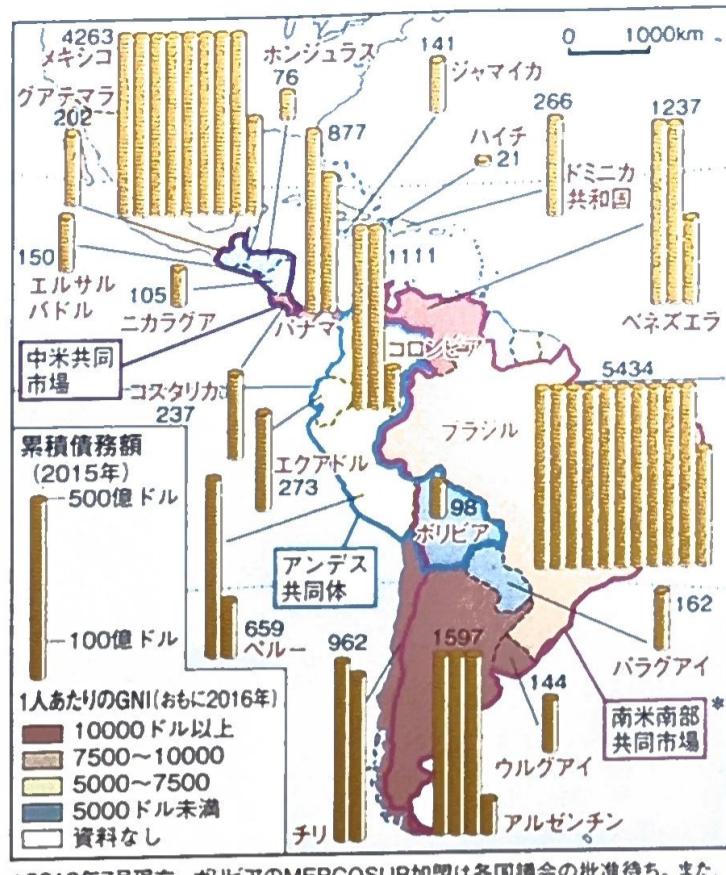
①自由貿易地区 輸出入にかかる税金が免除される特別地区。マナオス自由貿易地区は1967年に発足し、税制の優遇措置が多くの多国籍企業を引きつけてきた。とくにオートバイや家電製品の生産がさかんである。

① メキシコの低賃金労働力を活用し、税制の優遇を受けて輸出向けの生産を行う保税輸出加工制度および工場。



▲① 海岸沿いの高層ビル群と山の斜面に広がるファベーラ
(ブラジル、リオデジャネイロ、2013年撮影)

►② ラテンアメリカ諸国の結びつきと経済(World Development Indicators Database, ほか)



*2018年7月現在、ボリビアのMERCOSUR加盟は各国議会の批准待ち。また、ベネズエラは加盟資格停止中

プラスα

塩原に眠る鉱産資源をめぐって

ボリビアの南西部、標高3700mの高地に位置するウユニ塩原は、世界最大級の塩湖で、塩の層の下にある湖水には大量のリチウムが含まれている。リチウムは、パソコン・携帯電話・電気自動車などに使われるリチウムイオン電池の原料であり、今後、需要の大幅な増大が見込まれる。ボリビアのリチウム埋蔵量は世界最大と推定されている。世界の企業が関心を示すなかで、ボリビア政府は、リチウムを経済発展の原動力と考え、自国による資源開発に取り組んでいる。ただ、技術的な課題もあって、事業として成功するまでには時間がかかる見込みで、今後の動向が注目される。

にかわって、メキシコに生産拠点を移したアメリカ合衆国の企業が、この国の工業化に貢献している。

経済発展の光と影

ラテンアメリカ諸国では、外国資本や借金に依存して急速に工業化が進められた。その結果、無理な経済政策が行われ、累積債務という課題に直面する国も少なくない。また、ラテンアメリカはもともと経済階層が明確で、貧富の差が大きい社会であったが、急速な経済発展によって地域間の経済格差も拡大してきた。大都市が繁栄する一方で、発展から取り残された地方は貧しいままである。例えばブラジルでは、工業化の進んだ南東部と、発展の遅れた北東部や北部との間に、大きな地域格差が存在する。貧しい人々が仕事を求めて大都市に集中した結果、ファベーラの拡大やストリートチルドレンの増加、都市環境の悪化など、さまざまな都市問題が深刻化している。

一方、工業化によって経済が発展し、人々の生活水準も向上して、豊かな消費生活が実現してきた。なかでもブラジルは、BRICSの一つとして、世界の経済において存在感を増しつつある。豊富な鉱産資源と労働力、大きな国内市場に恵まれたブラジルは、さらなる経済発展の可能性をもっている。2014年のサッカーワールドカップや2016年のオリンピック開催地決定も、世界の関心をブラジルに引きつけた。また、ラテンアメリカ全体の経済統合に向けた動きもあり、1995年に発足した南米南部共同市場(MERCOSUR)は、自由貿易市場の確立を目的として、5か国が加盟している。

チェック

経済の発展に伴って、ラテンアメリカ各国ではどのような課題が生じているか、説明しよう。